

リアリティとアイデンティティ

—コミュニケーションの視角から—

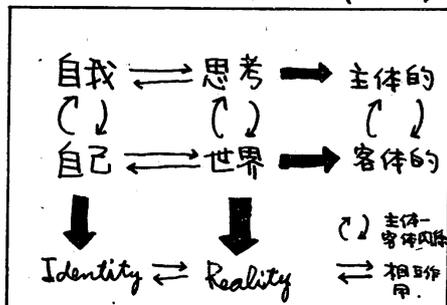
湧井由美子

----- 序 -----

我々は自明な現実には生きています。我々は普通、今現在自分が生きている現実の確かさを疑うことはない。合理主義と科学主義の時代に生きる我々にとって、現実とは「合理的」「科学的」なそれであり、それ以外の生きている世界の論理……未開文化や精神病理等……はあたかも「全く理解不能」の如く、「愚かさ」そのものの如く打ちあきらめてくる。

だが、これらの「非現実」的な世界の論理は、我々に内在する機制である。我々の無意識の論理はそれらと同一の論理機制をもつ。それは人間のシンボル化活動……表象活動にとって固有の不可欠な次元なのである。子供は大人の無意識であり、我々にとって、この現実が唯一の現実として打ちあきらめてくるその過性の考察は、我々のもとも内なる無意識的世界を開示し、同時に、現実の解体の論理をも示しうるのである。

世界の構造は自己の構造と不可避的に関連しており、世界は思考の、自己は自我の関数として成立する。我々は、誕生とともに、自我と思考を、すなわち自己と世界を織りあげていく。シンボル・記号・言葉等は自我と自己、思考と世界を形づくり、自我と自己、思考と世界は、シンボル・記号・言葉を生み出す。コミュニケーションと身体は、自我・思考・シンボルの共通の母胎であり原基である。自我・思考は構成する主体として自己・世界を構成する。Identity とは自我と自己の関



係が生む感覚であり、Reality とは思考と世界の関係から生じる確かさの感覚である。自我と思考、自己と世界が切り離せぬものであると同様、Identity と Reality も相互に深く関連しあっている。Identity を Reality から独立に論じること、並に、Reality を Identity と切り離して論じることとも十分な論述とはいえない。両者は相互補完的に生きている世界を構成しているのである。

Reality と Identity は漸成する。漸成の視角は、異なる世界を異なるものとして把握するとともにそこに至る道をもさしめることが出来る。それは、言葉・シンボル・記号に質の差と統一的理解の観念を導入する。それは、「混行」と解体、回復と再編の論理を見いだすことを可能にし、人間の危機の心理-社会への根底的な視角を与える。それは、疎外と回復、抑圧と解放の両義性を明示化し、危機の境位を開示するのである。

Reality と Identity は漸成する。漸成の視角は、異なる世界を異なるものとして把握するとともにそこに至る道をもさしめることが出来る。それは、言葉・シンボル・記号に質の差と統一的理解の観念を導入する。それは、「混行」と解体、回復と再編の論理を見いだすことを可能にし、人間の危機の心理-社会への根底的な視角を与える。それは、疎外と回復、抑圧と解放の両義性を明示化し、危機の境位を開示するのである。

-----S-R理論と生成モデル-----

行動主義はアモルフな一般的傾向性として、人間の環境による決定と無限の可塑性を導出する。人間が環境によって決定される存在であり、無限の可塑性をもつということは、個人の能力や性格を「天性の」ものと断じ、運命として従うことを尋求し現存秩序を正当化する傾向に対しては一定の批判の根拠となりえた。だがこれは、人間の根本的な受動性をアモルフに前提とするに及び、強力な支配イデオロギー、すなわち人間性と人間行動の操作イデオロギーに献身するのである。

行動主義の根本的な価値判断はその厳正科学主義にある。心理学を非科学的な「内省」や「内観」から解放することこそ行動主義の根本的な主張である。だがこの厳正科学主義としての行動主義は、(1)方法としての行動主義から拡大し人間における意識活動や心的活動という経験領域の存在を「否定」しつらなことで、(2)実験科学として外的原因の操作による主体の反応の差異のみに着眼しつらなことで、そこから拡大して環境決定説に陥つたこと、(3)行動を決定する外的要因の重視のあまり人間行動と人間の完全な操作可能性を導出しつらなことで、という3点において、単に方法としての厳正科学主義を越え、人間についての実体的な見解を提出するに至る。ここにおいて、行動主義は社会学における社会統制イデオロギーと結びつき、過度に社会化された人間像を理論の前提として生むに至るのである。

チョムスキーは言語行動がS-R理論図式からは充分理論化されないと批判しその理由を言語能力のもつたような性質に求めた。(1)言語能力は常に改新的に文を生み出し、言語使用の動機として必ずしも刺激を必要としない。(創造性) (2)言語は表層構造からは知りえない抽象的構造(深層構造)を持つ。(抽象性) (3)言語は個別言語の特長を越えた、あらゆる言語に共通の性質を持つ。(普遍性) このチョムスキーのモデル化はS-R理論の対極に位置するひとつの人間行動分析の視角を予感させる。そのモデルを生成モデルと呼ぶことにしよう。(左下を参照)

Chomsky	行動主義
抽象性 ←→	可視的行動の重視
創造性 ←→	刺激に対する行動の一義的決定
普遍性 ←→	特殊的社会化の強調

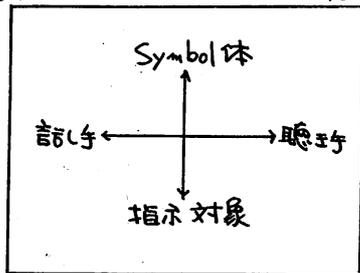
チョムスキーの理論は言語学固有の、統語論というごく限られた領域における理論展開でしかない。だがそれは人間の行動に対する新しい視角をはらんでいる。

もっとも一般的に生成(generative)を定義すると、それは「内部からの運動展開によって構造、形態を産出・形成すること」であるといえる。ピアジェの発生的認識論、チョムスキーの変形生成文法、ヤコブソンの音韻論、フロイト・エリクソンの漸成原理等は生成モデルとして位置づけうる。これらの諸理論は、(1)実体モデルか分析モデルか (2)微視発生か個体発生か(系統発生か)という相違こそあれ、いずれも抽象性・創造性・普遍性を理論の根底に仮定しているのである。しかも、これらの相違は実際には個々の理論展開において相互補完的・代替的・交替的なモデルとして同時に含まれるのである。(下表参照)ここから、生成モデルが行動主義に比肩しうる対立モデルであることが示しうる。

Werner	微視発生	個体発生	「退行」	系統発生
Jakobson	音韻体系論	個々の音韻獲得	失語症	比較音韻論
精神発達	社会的習得の発達	精神発達論	精神病	比較文化文化変動

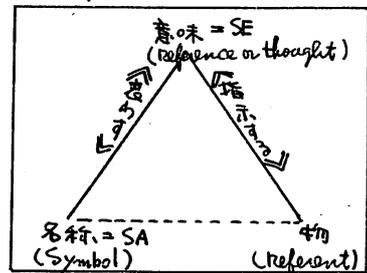
-----コミュニケーションの基礎理論-----

社会学においては、シンボル・記号・言葉について十分に考察せずその一側面のみを強調したコミュニケーション論が一般的である。シンボル・記号・言葉は「環境適応行動のための生体コントロール情報」であり、「共同作業のための伝達媒体」であったり、「非合理的な情緒・情動をひきおこし人々を行動に駆りたてるもの」でありたりする。一方においても、とも「合理的」「有用的」な行動や思考を生むのがシンボル・記号・言葉であり、他方 呪術や迷信・儀式等「非合理的」「非有用的」いや「反環境適応的」ですらあるような行動や思考を生むのもまた、シンボル・記号・言葉なのである。多くの場合、社会学ではこの両義性に真に着眼されることはなく、この二つのシンボル理論を関連させ統合的に把握する観念もまた充分ではなかった。実際、シンボル・記号・言葉が生物体行動に関われない限り、これらほどのようにして人間に獲得され思考や行動に決定的な影響を与えるのが理解できないし、逆にシンボル・記号・言葉が行動に還元されるならなぜシンボル・記号・言葉を取りあげる必要があるのかわからなくなってしまう。シンボル・記号・言葉が人間の欲求や行動に全く関係がないならそれをとりあげる意味はなく、逆にそれが完全に人間の欲求や行動の表現であるなら、欲求や行動自体をとりあつかうことと大差ないであろう。



コミュニケーションは「身振りをはじめとする諸シンボル媒体を通じて、一方の主体(話し手)から他方の主体(聴き手)に話し手の意志・指示・感情・思考・認識等諸精神内容を伝達すること」と定義できよう。この定義に従えば、コミュニケーションの基本構成要素はウエルナー等の図式に従って左図のようにならねること

ことができよう。四構成要素を上図のようにならねず時、疑義が生ずるのはSymbol体と指示対象である。ここで指示対象とはほぼ意味の意、すなわちSymbol体でさしめず内容の意で用いているが、意味は実在の外界の事物であるのか? もとも素朴に考えた場合、言葉は外界につけた名であると考えられる。だがソニユール以来、このような素朴な命題論は否定されてきている。だが、Symbol体は外界の実在物と無関係であるとしたら、シンボル・言葉・記号の「有用性」「合理性」は否定されてしまうであろう。確かに語は物の名ではなく、語という音をはじめて世界を分節し意味をつくり出す。ゆえにその語が実在に何らかの関わりをもたねば、言葉の実践性は喪われる。ウルマンはオグデン及びチャーズに基づいて、意味関係を「表わす」と「指示する」という二関係によって把握した。(右図参照)この図式においてソニユールの Signifiant (SA=能記) と Signifié (SE=所記) は上図のように対応すると考えられる。「表わす」関係をもつシンボルにおいても「指示する」関係は喪われないのである。なぜなら本論文の見解によれば「現象化」されたメッセージにおいては必ず「指示する」内係が介入するからである。

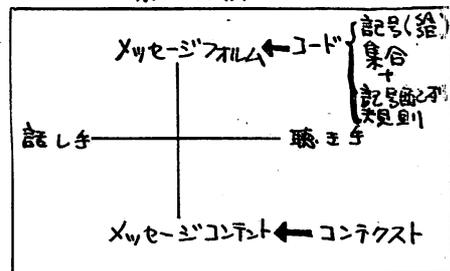


← シンボル 意味 →

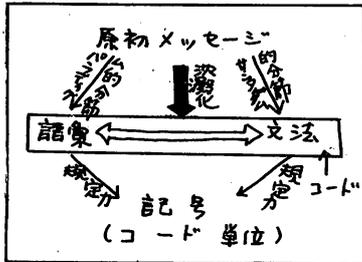
	Symbol - reference - referent
メッセージ 記号	メッセージ フォルム ←→ メッセージ コンテント SA ←→ SE

具体的な場における実在の発話(パロール or
メッセージ)は《現像化》された意味を荷う。
それは特定の場・世界・経験的事象・意図・欲
求に關与している。このような意味をメッセー
ジの内容 = メッセージコンテントと呼ぶ。例えば、「鉛筆!」と云って鉛筆を持
ておねさんに走りよる子どもの意味しているのは、また子どもの手に握られた
その鉛筆をさすのであり、決して抽象的クラスをさすのではない。《現像化》さ
れたメッセージにおいては、意味は実在の特定の文脈の対象や意味であり、特定個
人の特定空間・特定時間における体験・知覚・情緒・思考に結ぶつき、一回限りの
ものなのである。一方潜在的なコード(オラング)の単位としての記号は、特定の
対象に結びつけられない意味をもつ。(上表参照)この考察から前ページのコミュ
ニケーションの基本構成素を書きなおすと右図
の如くなる。コミュニケーションは、た
とえば一語発話(「鉛筆!」等)や信号であ
っても、《現像化》されているかぎり、メッセ
ージの交換である。

では一体子どもはどのようにして記号やコー
ドを形成獲得するのであるか? 従来、言語学や社会学では、言語やシンボル・記
号は社会的コードであり個人に学習されることのみが強調されてきた。メッセー
ジはコードの合成によりはじめて成立しようと考えられていたのである。だがそれは
コミュニケーション発達の観点からすれば非合理である。むしろ、子どもは誕生と
ともにメッセージの交換を行うが、そのメッセージのく分節化によって社会的記
号が成立してくると考えられるべきなのである。メッセージのサンタクムの分節は



“文”を構成し一語発話・二語発話・三語発話というよ
うに統語構造を導出・沈澱化し、一方パラダイクムの分
節は語彙を形成する。記号とはこのような二重(場合に
よっては片方だけ)
の規定力をもつた単
位である。象徴・信



号はこのような体系化が低次のとどまったもの
であるといえる。体系化・制度化・明示化の
度合から、諸シンボル媒体の類型化を行うこと
ができる。(右表参照)

このような分析が記号作用・意味過程から見
たコミュニケーション論であるならば、話し手
・聞き手から見たコミュニケーションの基礎理
論の視角も存在する。話し手・聞き手が相互に
自由に役割交換しようような場合を相互的コミュ
ニケーション、この役割が固定化し話し手・

体系化	制度化	明示化	シンボル媒体類型
↑ 社会的 大 多 数 の 間 に	↑ 社会的 +	↑ 明示的 +	論理的言語等
↑ 社会的 大 多 数 の 間 に	↑ 社会的 +	↑ 明示的 -	詩的言語等
↑ 社会的 大 多 数 の 間 に	↑ 社会的 +	↑ 明示的 +	個人・小集団特有の暗 号的論理的コード等
↑ 社会的 大 多 数 の 間 に	↑ 社会的 +	↑ 明示的 -	個人・小集団特有の暗 号的詩的コード等
↑ 社会的 大 多 数 の 間 に	↑ 社会的 +	↑ 明示的 +	交通標識・交通信号等
↑ 社会的 大 多 数 の 間 に	↑ 社会的 +	↑ 明示的 -	社会的象徴等
↑ 社会的 大 多 数 の 間 に	↑ 社会的 +	↑ 明示的 +	個人的・小集団的符号 等の使用法等
↑ 社会的 大 多 数 の 間 に	↑ 社会的 +	↑ 明示的 -	個人的な象徴的・無基 礎的言葉等

聞き手の役割交換が自由に行なわれえない場合を一方的コミュニケーションと呼ぶ。

また、話し手と聞き手の意図が一致しない場合を非完成的コミュニケーションと呼ぶ。

完成的コミュニケーション	相互的コミュニケーション
	一方的コミュニケーション
非完成的コミュニケーション	非意図的コミュニケーション
	非完結的コミュニケーション

話し手が伝達の意図を持たないのに聞き手が何かをうけとる場合を非意図的コミュニケーション、一方話し手が伝達の意図をもって「発話」しているのに聞き手が気づかぬ場合これを非完結的コミュニケーションと呼ぶ。(上表参照)

-----精神発達 の 四 段 階-----

言語発達過程、思考発達過程、自我の発達過程の考察から、精神発達の四段階仮説を導くことができる。

言語発達は、伝達の側面よりもむしろシンボル化の認知的側面から考察する必要がある。伝達、特に直接的な欲求充足的な伝達は確かに生後すぐに生起し、しかもそれが母子間にかなり早期に信号の位置を得、子どもの側も自発的にその信号を察して外界を操作していく自信を得る。主に叫喚音による、行なわれるこのような直接的欲求充足的な伝達は、子どもの言語活動にと、特に動機側面において重要な意味をもつ。だが言語はこうした伝達の音声から生ずるのではなく、むしろ、より認知的、かつ無動機的な音声活動(非叫喚音)から生起するのである。従って言語発達の考察は伝達よりもむしろ表象活動・シンボル化活動に着眼して考察されねばならない。

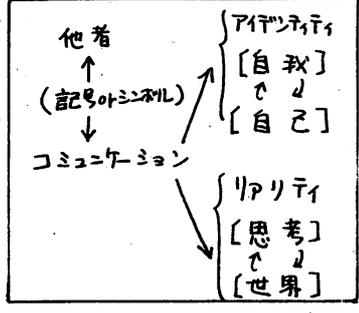
発達段階	エリクソン	ピアジェ	ミード	言語発達(時期)
(IV) 11~15	同一性 vs 同性 拡散	形式的操作 期		記号=レプレジ 結合の崩壊と 記号の解放
(III) 7~11	生産性 vs 劣等感 労働同一化	具体的操作 期	Game	記号=レプレジ 結合期
(II) 2~7	自発性 vs 罪責感 遊戯同一化 自律性 vs 恥感 二極性	前操作的思考 期 (直観的 前概念的)	play	記号生成期
(I) 0~2	信頼 vs 不信 一極性	感覚運動期	非有意義シン ボルによるコミ ュニケーション	身体言語

ピアジェは子どもの思考が言葉によって始まるのではなく、身体活動水準に固有の思考の様式があると考えた。それどころかシンボル水準の思考は身体活動水準の思考を基礎にその内的とり入れによつてのみ可能なのである。同様に明確に自己を認識する自我の成立以前にその萌芽的な形態が存在し、自由にあらゆることを対象化する言語活動以前にその前段階としてシンボルの発達段階が存在する。このような考察から、諸発達心理学の観点を統合すると上表のような四段階の対応表が得られる。

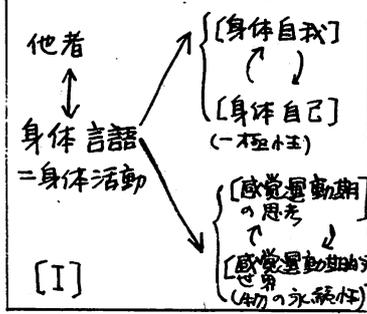
四段階仮説は、発達心理学固有の基準からすれば充分な段階わけではないかも知れぬが、思考・自我・シンボル、はいこはコミュニケーションの様式・形態の差を適切に把握すべき社会学の視野の基礎理論としては充分妥当な仮説であると考へられる。

各段階の精神世界は、思考・自我・シンボル・コミュニケーションを結びつくる観点によつて統一的に把握されねばならない。これらは相互に関連しあい、どれか

ひとつを考察することは必ず、他に言及することになるからである。このような観
 念を図化すると右図の如くなる。この図式に従って各
 段階を述べてみよう。



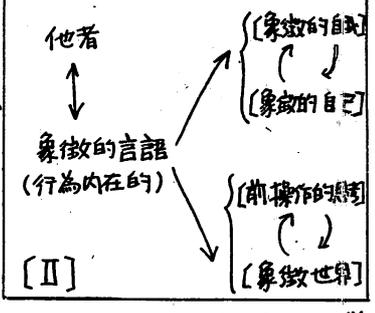
まず、第I段階においては、基本的には子どもの側には意識されたシンボルは存在しない。第I段階の子どもは叫喚や身振りとい、身体言語で伝達することができ
 るが、その「発語」は誰かにむかって意識して発せら
 れたのではなく、非意図的コミュニケーションであるに
 すぎない。子どもの「発語」の解釈は成人に依存しており、自律的なフォームは存
 在しない。この段階は、基本的には、未だ表象世界が成立しない段階と考えられ
 る。従って基本的に伝達的な意味では、身体言語とは成人にとってそうであるに
 すぎない。ベッテルハイムによれば、子どもは能動的に伝達の意図でサイン・信号を



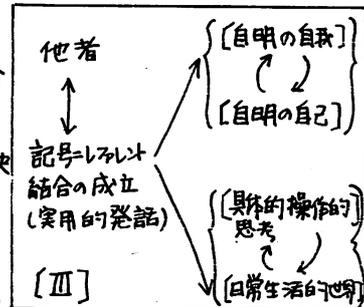
発するようになるのは、してそれほどのことでは
 ない。この身体の世界は前シンボリック段階であるとして
 も相対的に独自の思考世界を形成しているのである。

従ってこの時期の基本的心理過程は出生による母親か
 らの分離不安を経験しつつ外界の存在を感知し、母親と
 の向に「相互的調整」「くつろぎの相互性」とい、安定
 した関係をコミュニケーションパターンの形成によ
 って獲得し、不安をのりこえ、外界への自分の積極的働きかけによ、体内感覚的知
 覚と感覚器官的知覚の間に種々の共通を形成し、自分の存在が「よいものである」
 という一極性の感覚、空間の一元性、時間の定方向性、安定した自己像、物の永続
 性の観念を形成することである。安定した[自我-自己]は、安定した外界の知覚
 をもたらし、不可避的な欲求不満や脅威の存在にもかかわらず、存在を維持し未来
 に「投企」しうる希望の感覚を子どもに与えるのである。

第II段階においてはシンボル-意味連関は未分化であ
 り、あらゆるシンボルは行為内在的である。第II段階は
 サインや信号ではなく、真の表象段階であるが、シンボ
 ルはこの段階ではコンテクストに埋め込まれることなし
 には理解不能である。メッセージフォームは不完全な分
 節しか形成しておらず、記号は生成途上にある。従って
 概念は真の概念ではなく、多くの情景や背景から取りは
 ぬきしめものであり、意味は対象自体よりもそれを分節する主体の側の認識・知覚・
 情緒(≡体内感覚)・行動意図により多く決定を依存している。シンボルの意味
 は話し手-聞き手の感情・欲求表出と分化していない。このようなシンボルを記号
 生成の低次的段階であることと合わせて象徴と呼ぶであろう。象徴は多義的であ
 り、あいまいな意味をおびており、精神発達第II段階において出現する多くの場合、
 安定度がきわめて低い。その場・その場の身体・精神エネルギーの付与によるマ
 ーク付けに意味が依存しているのである。表象段階のも、とも原初的段階、すなわち

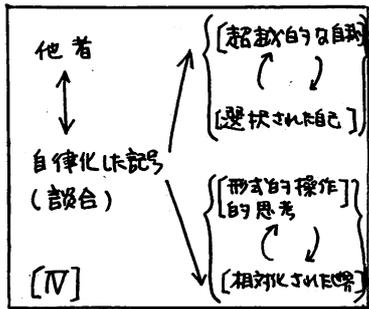


才II段階における思考は、このようなシンボルの構造から、ピアジェが「前操作的思考」と呼んだものとなる。この段階における因果性の把握は効果意識と時間経過に依存しているにすぎず、従って、世界知覚は「人工論」「无心論」「実念論」に拘り、推理の型は転導推理的である。この段階における子どもは、漠然とした身体的な自己分化をシンボル段階における自己分化に転化する。それは表象・シンボルを午ばかりに自分を象徴的客体として把握していくことである。遊びやひとりとごとは象徴的な自己と世界の構成的認識であり再体験様式である。ミードのplayの段階はこの様相を示し、エリクソンの自律性や自覚性は、身体エネルギーの特定部位への集中、すなわち意志と、外界の特定対象に対する知覚の集中、すなわち目的の向題をとり扱っており、これらはいずれも象徴的な思考様式の特徴である。この段階の子どもは自分が創り出した想像に脅え、空想と現実との間に区別を立てることができない。なぜなら子どもの「空想」は子どもの「現実認識」の構成法なのであるから。



第III段階においては安定した記号=レファレント結合が成立する。あらゆる発話において、特定の意味がメッセージにおいて決定される、すなわちレファレントが決定されるのはI, II, III, IVすべてに共通する。だが、才I, 才II段階においては、サインやシンボル等メッセージ・オウムを形成する単位は安定した分節と外界への対応を欠いており「場と主体依存性」であり、才IV段階においては、外界への指示的なレファレントではなく、概念的な必要も外界との対応をもたぬ意味が成立する。だが第III段階においては、もはやシンボルは行為や身体態勢によらず左右される不安定な「生成途上の」意味ではなく外界と一義的に結びついた意味をもつ。発話は何らかの日常生活の意味を荷うことが前提とされており、通用性要求と行動要求が前面に出される。記号の意味は日常生活的な使用法により決定され、日常生活の自明の対象や行動様式を意味する。このような事態を記号=レファレント結合の成立と呼ぼう。記号=レファレント結合は自明の世界像を創り、記号は必ず、外界における対応物、もしくは実用的意味を荷う。物はあるがままに即自的に存在し、主体の活動にかかわらず永続するものとなる。子どもはこのような自明の世界を、日常生活世界の秩序に従ってうまく操作することに焦点づけられている。子どもはもはや「想像」や「空想」に脅かされることはなく、「現実」を「空想」から区別し、「現実」の实在性を確信する。それは我々が日常生活のなかで「日々の仕事にいとむ」ために「行為を介して現実に参加」している態度そのものである。このような現実的な適格さに焦点づけられた態度こそ、協働や分業・平等の感覚、競争の感覚の根拠である。この段階の子どもは、具体的操作的思考であるピアジェはいう。子どもは外界を操作してはじめて認識する。だが子どもは「現実」を越えられない。子ども(第III段階の)の未来は現在の延長にすぎないのだ。

第IV段階において記号=レファレント結合が解離し、安定してはいるが外界への直接的対応物を持たぬ抽象的概念を示す記号が成立する。コミュニケーションにお



いは通用性要求と行動要求は潜在化し、いわばハバースの言う「談合」が可能になる。この段階において初めて、現実の真の相対化が可能になり、反省的行為が芽生える。ロピアエは形式的操作的思考の特徴が、「現実

をとりうる。総ての場合の中の一現象としてとらえること」であると云っているが、この形式的操作こそ、このような現実の真のとうえかえしを可能にするのである。このことは同時にエリクソンのいうアイデンティティの危機の段階に入ることを意味する。自己もまた、新たに獲得された批判的意識から免れうるものではなく、真に自分自身となるために世界の再構成と自己の再定義を必要とするのである。

以上四つの発達段階は、もっとも高い到達度、すなわち各段階の創発特性に着眼している。従って、各段階には、それ以前の段階が何らかの形で「保存」「維持」されており、精神の「深層世界」を形づくっているのである。ここから精神-社会世界の四水準理論を導出できる。(上表参照)

IV 論理の世界	*	*	*	記号の自律 超越的自記と選 択的自記 形式的操作的思考 と相対化された世界
III 日常生活の世界	*	*	記号しかた記号 自明の[自我-自己] 日常生活的 [思考-世界]	→
II 象徴の世界	*	記号生成過程 象徴的[自我-自己] 象徴的[思考-世界]		→
I 身体の世界	身体言語 身体性[自我-自己] 身体活動的 [感覚-世界]		「保存」	→
水準 連続階 (ホ)	I 0~2	II 2~7	III 7~11	IV 11~(ホ)

-----リアリティとアイデンティティの解体-再編の論理-----

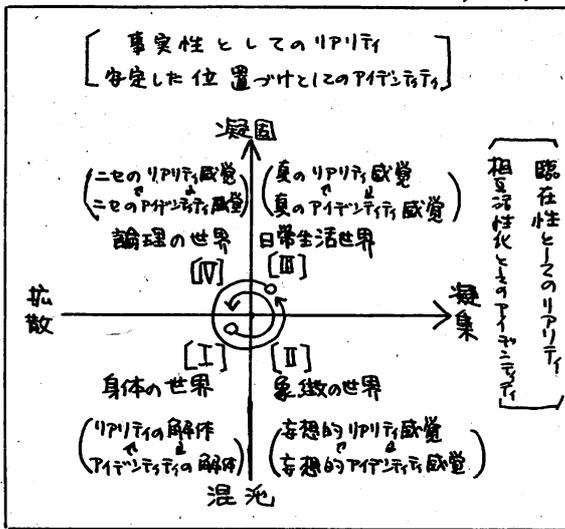
自己と世界、アイデンティティとリアリティの確かさの感覚は一体何に依存しているのでしょうか？直観的にこれは二つの源泉を持つているように思われる。まずリアリティから論じてみよう。リアリティ-現実性の確かさの感覚は、事実性と臨在性という二つの根拠を持つ。事実性とは、本質的には、主観に左右されない事物そのものの論理であり、論証的に正しいとされるが故に現実であるとされる現実性の感覚を指す。事実性の成立にとって、主観はできる限り対象から距離をおいて見ることを要求される。実際には、我々の五感はそのものの論理を把握しえないのでこれは、「複数の人間に共有された、社会的カテゴリーによる知覚とカテゴリー操作」によつて近似される。

だが、我々の確かさの感覚は、この事実性としての現実性に依存するだけでなく、「行動において真実と感ぜられるもの」「自分が今まさに真に関与している感覚」「参加」の感覚にも依存している。この確かさの感覚は、事実性としての現実性とまさに逆に、自分を世界に関与させる方向、主観と対象の分化を否定し、距離をな

くそうとする傾向性の上に成り立つ。この現実性の感覚を臨在性としての現実性の感覚と名づけよう。この二つの確かさは、エリクソンの *factual Reality* と *Actuality* にほぼ対応するものである。

このリアリティの二つの源泉に対応して、アイデンティティにおいても、安定した他者による自己の位置づけとしてのアイデンティティと、相互活性化、相互承認としてのアイデンティティが考えられる。前者は自-他の相違に主に関心は集中し、自-他を分化させる傾向の上に成り立つ。後者はそれとまさに逆に自-他分化を"のり越え"相互に深く交り込み根柢から承認し許容し相互活性化しようとする方向性の上に成立する。

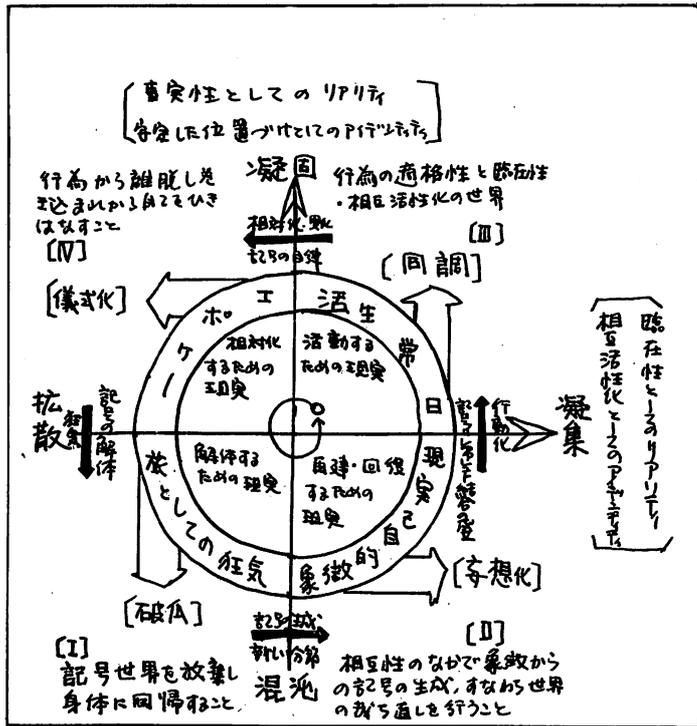
この二つの根柢は、精神-社会世界の四水準論に対応させるとどのように考えられるか？まず、事実性としての現実性と安定した位置づけとしてのアイデンティティは自-他分化の増大に対応するのであるから [I] → [IV] に従って増大する。今ここでは大きく二つに分け、[I][II] < [III][IV] という対応を考えこおそう。一方、臨在性としての現実性と相互活性化としてのアイデンティティはむしろ自-他分化を否定しようとする方向に対応する。だがそれは完全な自-他未分化状態に対応するのではなくむしろ、自-他の緊張関係をはらんだ相互性の世界である。従ってそれは [I][IV] < [II][III] という式によってあらわされよう。この二つの軸を直交した場合、そこに生じる四象限はまさに発達理論から導いた四水準論 ([I] → [IV]) と対応していることになる。(下図参照) 個体発生は [I] → [IV] の過程であるが、現実



性感覚の崩壊は [III] → [IV] → [I] → [II] の過程をたどるといえる。左図で()内はいわゆる病理学的な価値判断を含んだ叙述を示す。だが、[IV], [I], [II] とも必ずしも「病理」であるとはいえない。従来の「自明性」や「現実性」に関する評価はあまりにも短絡的かつ狭視野的といえるのではない。精神医学や精神病理学は往々にして「現実性」や「自明性」をプラスの価値をもつものと見、「現実性」や「自明性」を共有しない他者を「病理的」と決め

つけ、一方、認識論的な立場は、「現実性」「自明性」を往々にして「愚なるもの」「迷妄の源」と見、マイナスの価値を与えがらである。このような観点は勢急に評価を加えるために現実の構造を真に把握しえず、問題の真の深さに到達することも不可能である。「現実性」や「自明性」はそれ自体でプラスであるわけでもマイナスであるわけでもない。それは「生きられた論理」、「生の豊かさへの人々の叫び」においてのみ意味をうるのである。

これらのことから従来の現実の解体-再編に関する諸理論を位置づけると次ページの図の如くなる。図において、[III]は日常世界に対応し、[IV] → [I] → [II]は危機

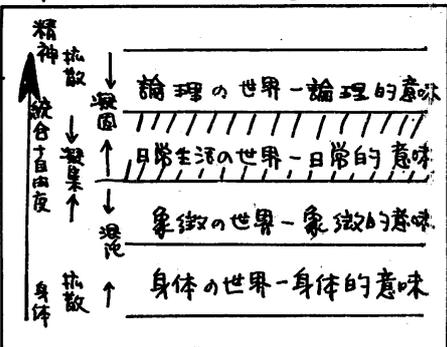


の心理-世界に対応している。左図において円内は移行の論理を示し、接線方向はそこにおける停滞的な「病理」形態を示している。

この移行は、対人的コミュニケーションにおけるコミュニケーションギャップやコミュニケーションの否定によって促される。接線的コミュニケーションや選択的不注意、二重拘束状況は、文化的変動やマージナルな文化的位置に対応し、リアリティとアイデンティティの解体を促すのである。

-----社会的リアリティの重層性-----

我々の意味の構造は重層的であり、それぞれの水準において独自の意味の性質を持つ。上の水準の意味はそれ以前の水準の意味の生成的獲得なしには生成しない。上の水準の意味は下の水準の意味から完全に「切りはなされる」時、意味消失が起ころがらざるを得ない。なぜなら、より上の水準の意味はその基底に暗黙の前提としてより下位の意味構造の存在を仮説しており、より上位の水準の意味空間では完全に汲みつくし得ない部分を必ず持っており、このためである。



意味とは、もともと根源的には「感覚の基層」における出来事である。この出来事としての意味は表象の出現により、認識力や感情や感覚を含め行為全体を巻き込んで象徴的意味に転化する。この意味は人々を行動に態勢づける作用を持つ。才四水準の意味はその上に成立し、行動から介した即自的な物質と結びつく。才四水準こそ、いわゆる精神の水準であり、我々の身体-精神活動がもっとも高度の統合と自由度を獲得している状態をさす。それぞれがリアリティは独自のコミュニケーション様式をもつ。身体的・エロスのコミュニケーション、象徴的コミュニケーション(儀式・祭式等)、日常生活における通用性と有用性に集束づけられたコミュニケーション、論理的な認識に集束づけられたコミュニケーション……これらは我々のコミュニケーション活動のなかに深く織り混ぜられているのである。

----- おわりに -----

本論文は、主にコミュニケーション・自我・思考・シンボルの基礎理論から、具体的な社会的コミュニケーション分析にむけての足固めをすることも目標とした。従って、生まれた世界の論理……リアリティとアイデンティティ……は未だ、不十分な展開にとどまっている。残された課題は、コミュニケーション分析をより具体的な次元で行うことから、我々の生まれた世界の論理を、骨組だけでなく、立体的・実体的に展開していくことである。

〔参考……修論の目次〕

序論……生まれる論理への飛翔	Ⅶ章……精神発達 of 四段階仮説
§1 生まれた世界の論理	§1 思考・自我・シンボル
§2 生成するリアリティの論理	§2 精神発達の四段階
Ⅰ章……S-R理論と生成モデル	§3 発達段階論から水準の理論へ
§1 S-R理論の理論的諸帰結	Ⅷ章……リアリティとアイデンティティ
§2 Chomskyの行動主義批判	§1 リアリティの構造
§3 生成モデルの構想	§2 アイデンティティの構造
§4 生成モデルと生まれた世界の論理	§3 リアリティとアイデンティティ
Ⅱ章……コミュニケーションの理論	§4 対人的コミュニケーションとリアリティ・アイデンティティの揺らぎ
§1 言葉・シンボルの理論と社会学	Ⅸ章……生成モデルの視野
§2 コミュニケーションの基礎理論	§1 生成モデルの視野
Ⅲ章……コミュニケーションと表象活動の発達	§2 社会的リアリティの重層性
§1 コミュニケーションの原基	§3 コミュニケーションと精神病理
§2 表象能力の形成	§4 文化変動と比較文化
§3 音声的シンボルの萌芽とその発達	Ⅹ章……旅の概念
Ⅳ章……思考の発達	§1 リアリティとアイデンティティの矛盾
§1 ミードの思考理論の限界	§2 最も広範なアイデンティティと最も個体的なアイデンティティ
§2 ピアジェの基本概念	§3 旅の概念
§3 言語以前の世界	=参考文献=
§4 表象的思考のはいまり	=補論=
§5 具体的操作期と形式的操作期	
Ⅴ章……自我の発達	
§1 自我とは？	
§2 希望	
§3 意志と目的	
§4 適格さの感覚	
§5 選択された忠誠	

(なお、要約である本稿は必ずしも修論の叙述順序にはとってない。)

(わくい ゆみこ)